

# 英知としての諺・格言に潜在する教育視座（Ⅱ）

—modeling & mirror-neuron—

田中 亨胤

日常の生活世界で何げなく使っている「諺」「格言」に潜在している、「世俗的教育視座」（力みのない含みとしての教育の指針）を、『ことわざ』（大辞典）を基礎資料として可視化することに、本研究の一連の目的がある。広範囲にわたる複合的教育視座を俯瞰しつつ、幼児期の教育・保育に照準を置き、「諺」「格言」に滲み出ている教育視座を把握するものである。本研究の「Ⅰ」と同じ前提にて、教育学としてのぶれない理論仮説が内包されていることを明らかにする。

キーワード：教育理論研究仮説、ミラー・ニューロン、モデリング、環境影響

## Ⅰ はじめに

本研究の「Ⅰ」（京都文教短期大学研究紀要第56集／2018年）と同様の問題意識、課題の設定、資料収集方法等により、本研究の「Ⅱ」を進めるものである。日常の生活で何げなく使っている「ことわざ」（諺／格言）は、自分の言葉では伝えきれない、語りきれない思いを、端的にした的確に表現してくれる。実に便利な借り物としての言語文化ツールである。感覚的にかつ理屈抜きに、その意味世界を納得してしまう。魔法の言語文化ツールである。「ことわざ」は、その人口に膾炙してきた背景（口承文芸）から、世俗的な言説であるからして、「ことわざ」はそのままにして科学的・学問的理論仮説として確定することには難しいところがある。さりとて「ことわざ」は、芸術的言語文化にとどまるものであるとも言い難い。

「ことわざ」の意味世界は、そのままを一般化して、真実として受けとめることには、要注意が求められる。それでいて過去からこれまでの素朴なる長い庶民生活を感じ取る貴重な資料となると考える。この意味で、「ことわざ」は、社

会的文脈を潜在させた言語文化遺産の宝庫であり、現代にもつながる生きた重要な言語文化である。その表現方法においては、「比喩」「誇張」「反語」「掛けことば」など、多様である。「ことわざ」は、短い言語でもって語られるところにこそ、印象的なメッセージを発信しており、その意味は味わい深いものがある。受け止める側の、自らのこれまでの経験値や想像力に照らして受けとめることも有効であり、時には個人の域を超えた納得の真実となることもある。「ことわざ」に時代や風土などの背景を重ねることも、「ことわざ」のぶれない読み取りになる。「ことわざ」には、その語り継がれていくその時折の、必ずしも明示され得ない社会的風土が背景にあり、内包されていると思われる。

## Ⅱ 研究の目的

### 1. 問題の所在

本研究の「Ⅰ」と同じく、本研究「Ⅱ」においても、『ことわざ』（大辞典）を基礎資料<sup>1)</sup>として、「ことわざ」に潜在する経験値的・世俗的「教育視座」を素描するものである。「ことわざ」

は、必ずしも学術的言語文化ではない。この点からして、論理的かつ明快なる訴求力でもって、「ことわざ」に内包されているのであろう教育視座を可視化し、断定的に教育理論との対応を確定することには、相当なる勇気と難しさがある。さりとて陳腐なることとして脇におくことも否定することもできないのではなからうか。

「ことわざ」の意味世界には、飛躍するところもありつつも、学術的に解き明かされ、提唱されてきたさまざまな教育理論と共振するところも多々ある。

## 2. 研究の目的

本研究「Ⅱ」の「英知としての諺・格言に潜在する教育視座」では、上記の問題の所在をふまえ、次の諸点を明らかにすることを、研究の目的とするものである。1つは、「ことわざ」に潜在している教育視座を可視化することである。2つは、可視化した教育視座を、これまでに学術的に解き明かされ、提唱されてきた教育理論との接点なり関係性を把握することである。これら2つの目的を探究することによって、「ことわざ」は、経験値としての「世俗的教育視座」にとどまるものではなく、「持続可能な教育視座」であることも指摘することとする。

なお、「本研究課題（Ⅱ）」の本稿では、副題として示す「modeling & mirror-neuron」に照準を置いて、「ことわざ」を抽出し、意味世界を整理することにより、「ことわざ」に内包されている教育理論視座を明らかにすることを目的とするものである。

## Ⅲ 研究の方法

### 1. 基礎資料

○基礎資料名：「北村孝一・監修『故事俗信ことわざ大辞典』（第二版）、小学館、2012年」

なお、本基礎資料は、1982年に第一版が発行されている。第二版は、第一版を全面的に改訂したものである。

### ○基礎資料の概要

「基礎資料」は、(株)小学館創立九十周年にあたる2012年に「小学館創立九十周年記念企画」として発行。日本の「ことわざ」、中国に起源を持つ「故事成語」、西洋から入ってきた「ことわざ」、日本各地の「俗信」などを集大成。実際に文献上に現れた使用例を、原則として近世以前に限って掲載。収録項目数は、約43000項目。監修は、北村孝一氏。編集委員として、佐竹秀雄・武田勝昭・伊藤高雄の三氏が参画。

### 2. 資料分析条件

本研究課題は、継続研究として設定するものである。「子どもの存在・概念」「環境を通しての教育と育ち」「知的好奇心から生まれる学習意志」「互い関係の中でのコミュニケーションの生成」「家庭生活と親子関係」「生涯発達と育ち・学び」等を想定し、「ことわざ」に内包する教育視座を把握し、論究するものである。それぞれの柱は、個別でありながら、相互に関連し合うものであることから、分析事例としての資料活用においては、「ことわざ」の重複使用を排除しないこととする。

本研究「Ⅰ」では、そのうちの「子どもの存在・概念」に照準を置いて、研究目的にそって論究を試みた。本研究「Ⅱ」では、「環境を通しての教育と育ち」に照準を置くこととし、副題に示す「モデリング：modeling」（コード：MD）と「ミラー・ニューロン：mirror-neuron」（コード：MN）をはじめ、「環境影響」（コード：EI）および「愛着・親しみ」（コード：AF）をキーワードとして、「ことわざ」事例を分析することとする。なお、「ことわざ」の事例抽出において

は、基本的には『基礎資料』に基づくものとするものの、『基礎資料』に掲載されていない人口に膾炙する一般に用いられている「ことわざ」も追加した。

### 3. 資料分析手順

○五十音順見出し項目に基づく掲載の43000項目から、本研究「Ⅱ」の課題に関連する「ことわざ」の抽出

○「ことわざ」例に記載された観点のキーワード化（キーワード・コード4点）

○読み取りに基づく教育理論視座との接点とその可視化

## Ⅳ 資料分析

ここでは、第1に、本研究「Ⅱ」における観点に基づき「ことわざ」の用例を抽出。第2に、それぞれの意味を、基礎資料である『ことわざ』（大辞典）において示されている解説内容の要点を例示。その上で、第3にそれぞれについて、「コード」（MD）（MN）（EI）（AF）を付すこととする。

### 1. あ～お欄

「あ」欄においては、23事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

○「あくびは人にうつる」：「あくび隣にうつる」一人があくびをすると周囲の者にも伝染する。（MD）

○「阿呆の真似する阿呆」：愚かな者の真似をする者は、やはり愚かな者である。（MN）

○「以心伝心」：（仏語）ことばでは表せない悟りや真理を心から心へと伝えること。／無言のうちに心が互に通じ合うこと。自然に相手に通じること。（MD）

○「一見旧（旧知）の如し」：「一面旧知の如し」一度会っただけなのに、意気投合して旧知のように親しくなること。（MN）

○「一匹吠えれば皆吠える」：「一犬形に吠ゆれば百犬声に吠ゆ」：思わずその雰囲気に合わせてしまう。（MD）

○「田舎者でも育てば違う」：田舎者でも育った環境によってはあかぬけする。（EI）

○「犬も人を見れば尾を振る」：犬でさえ、人を見れば尾を振って愛嬌を見せる。人もあまり不愛想で愛嬌のないのはよくない。（AF）

○「犬猫も三日飼えば（扶持ちすれば）恩を忘れず」：主人の恩を忘れない。人間が恩を知るのは当然である。（AF）

○「魚心あれば水心（あり）」：好意があれば相手もおのずから好意を持ってくれる。お互いが自然と引かれ合うこと。（MN/ AF）

○「氏より育ち」：「氏より育て柄」「生まれより育て」「生まれ付きより育てが第一」人柄や立ち居振る舞いは、生まれついた家柄や身分よりも、育った環境や教育による影響が大きい。（MD/ EI）／「氏素性は争われぬもの」「氏素性は恥ずかしきもの」も結局は育ち方の環境とも受けとめられる。

○「烏烏の私情」：烏が親鳥に恩返しをするように、子が親に孝養を尽くそうとする心。（MD/ EI）

○「生みの親より育ての親」：自分を生んでくれた親よりも、育ててくれた養父母に恩愛を深く感じる。（EI）「生みの恩より育ての恩」：自分を生んだだけの親より、育ててくれた親の恩の方がより重い。（EI）

○「老いたる馬は路を忘れず（知る）」：路に迷ったとき、老馬を放って、その後からついて行けば道に出ることができる。経験を積んだ者は、その行なうべき道を心得ている。（EI）

- 「幼子は白き糸の如し」: 幼い子どもの躰けが大切であること。環境に染まりやすい。(EI)
- 「幼馴染は千年たっても忘れぬもの」: 子どもの頃の友達や体験は、いつまでたっても忘れないものである。環境体験の重み。(EI)
- 「男の子は父に似、女の子は母に似る」: 「男の子は母に似、女の子は父に似る」も同じ。育ててもらった環境のなせる業。(EI/MD)
- 「己れ親に考を尽くせば子もまた己に考を尽くす」: 「己れ孝順の道を行なえば孝順の子を生ずるなり」: 自分がよく親に孝行をすれば、子もまたこれを習って、自分に孝行を尽くしてくれる。(MD/EI) 「己れ人の親を敬えば人また己れの親を敬う」も類似。
- 「親が嘘つきゃ子が嘘習う」: 子は親のすることをまねするものであるから、親は十分に言動に注意しなければならない。(MD/EI)
- 「親が親なら子も子」: 親がだめだと子も同じようにだめである。(MD/EI) 「親に似た蛙の子」 「親に似た子瓢箪」 「親に似た鮫の子」 「親に似ぬ子なし」 「親の子」 「親見たけりゃ子を見ろ」 「親も親なら子供も子供」 なども類似。芳しく無い評価の「ことわざ」。
- 「親の背中を見て子は育つ」: 日常の親の姿から子どもは学ぶ。(MD)
- 「親も親なり子も子なり」: 親もりっぱだが子もりっぱである。(MD/MN/EI)
- 「親も嘉兵衛、子も嘉兵衛」: 親子がよく似ていること。(MD/EI)
- 「親を習う子」: 子は親を見習うものである。(MD/MN/EI)
- 「女七分に男三分」: 家庭での子供への感化力は母親のほうが父より強い。(EI)

## 2. か～こ欄

「か」欄においては、15 事例を抽出した。象徴

- 的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。
- 「蛙の子は蛙」: 子どもの頃は親に似ていなくても、大人になると結局は親に似てくる。(MD) 「蛙の子は鯰にはならぬ」 「乞食の子は乞食で終わる」 なども類似。
- 「可愛い子には旅をさせよ」: 子どもがかわいければ、甘やかさず世の中に出して、さまざまな経験をさせることが大切である。(EI)
- 「観学院の雀は蒙求(もうぎゅう)を囀る」: 勸学院にいる雀は、学生が「蒙求」を読むのを聞いて覚え、それを囀る。身近に見たり聞いたりしていることは、自然に習い覚える。(MD)
- 「狐の子は面白」: 子どもは親に似る。(MD)
- 「君(きみ)射れば臣決す」: 主君が弓を好めば、家臣はゆがけをはめる。上に立つ者のする事を臣下もまねる。(MD/AF)
- 「君心有れば民心有り」: 君主に民を思う心があれば、民も君主を尊敬する。(MD/AF)
- 「賢を見ては斉(ひと)しからんことを思う」: 賢者を見ると、自分も努力してこのようなすぐれた人になりたいと思う。(MD/AF)
- 「子は親に似る」: 子というものは結局は親の性質を受け継いで親に似る。(MD/EI)
- 「子は親を映す鏡」: 子どもの振る舞いを見れば、どのような親かを知ることができる。(MD) /EI 「子を見れば親がわかる」も類似。
- 「孝子匱(とほ)しからず、永く爾(なんじ)に類を錫(たま)う」: 孝行な子が何代にもわたって続々と生まれ、孝行な者にはまたその子が同じように孝行を尽くす。(MD/EI)
- 「口吻を学ぶ」: 人の言うことをまねする。他人の言説にならう。(MN/AF)
- 「蝙蝠(こうもり)も鳥の真似」: 蝙蝠も鳥のまねをして飛ぶ。つまらぬ者でも優れた人の言動をまねていけば、それらしく見える。(MD/EI/

AF)

- 「心は境に随ってその相を顕（げん）ずる」：心は状況や境涯しだいでどのようにも変化する。(EI)「心は所によりて澄みなん」も類似。
- 「言葉は国の手形」：言葉の訛りは、通行手形のようにその人の育った国を示す。(EI)
- 「子供と芋種は隠されぬ」：種芋が必ず同じ種類の芋に生長するように、子どもが親に似るのは隠しようがない。(EI)

### 3. さ～そ欄

「さ」欄においては、21 事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

- 「侍の子は鍔音に目を覚まし、町人の子は御器箸の音に目を覚ます」：人は、各自の生まれつきや環境に応じて、敏感に反応するものが違う。(EI)
- 「猿が糞を揉むよう」：わけもわからず人まねをする。(MD)「猿が髭を揉む」も類似。
- 「三遷の教え」：孟子の母が、孟子を教育するために、より適した環境を求めて三度その居を変えたこと。(MD/EI)
- 「主が（も）主なら家来も家来」：主君がよくないと相応に家来もよくない。(MD/EI)
- 「朱に交われれば赤くなる」：交際する仲間や友人によって人は感化されやすい。人は環境に影響されやすい。(MD/EI)「墨に近づけば黒し」「麻に連なる蓬」も類似。
- 「習慣は第二の天性なり」：日常的に繰り返すことで身についた習慣は、生まれつきの性質とほとんど変わらない。習慣は容易には変えられない。(MD/EI)
- 「姑に似た嫁がくる」(俗信・俚諺)：口やかましい姑の下で暮らして、いつのまにかその姑に性格が似た嫁ができあがる。(MD/EI)

- 「主人が主人なら下男も下男」：主人の性格や態度を使用人も見習い、似てくる。(MD/EI)
- 「春風の中に座するが如し」：春のそよ風を受けて生物が成長するように、慈愛あふれる良師の感化に接して学徳の修行を助けられる。(MD/EI/AF)
- 「姓は元を現わす」：血統や家柄は人柄にあらわれる。(MD/EI)
- 「知らずば人真似」：やり方を知らないときは、人のするのを真似るのが得策である。(MD)
- 「心（しん）は万境に随って転図ず」：人の心は環境によってどうにでも変る。(EI)
- 「雀百まで踊り忘れず」：雀は死ぬまで飛びはねる癖が抜けないように、若い時に身についた習性は年をとっても変らない。(MD)
- 「住めば都」：田舎や不便な土地でも、実際に住んで慣れ親しむと、格別不便とも思わなくなり、むしろ離れがたくなる。慣れてしまえばさして苦にならず、かえって気楽に感じられる。(EI)
- 「井水大魚無し」：井戸の中に大魚がないように、狭く閉ざされた環境では大人物は育たない。(EI)
- 「清水に魚棲まず」：あまり清らかな水には魚がすまないように、あまり潔癖すぎるとかえって人に親しまれず、仲間もできない。(EI)
- 「善人と居るは芝欄の室に入るが如し」：善人と共に居ると、香りのよい草のある部屋に入っているようだ。善人といると自然によい感化を受ける。(MD/EI)
- 「総領の甚六」：長男や長女は、大事に育てられるので、弟や妹に比べると、おっとりしていてお人好しである。(EI)
- 「俗に入っては俗に従え」：他郷に行ったら、その土地の習慣や風俗に従わなくてはならない。(MD/EI)「郷に入っては郷に従え」も類似。

○「育ちが恥ずかしい」：人の育ち方は自ずからふだんの言動にあらわれてしまうものであり、隠しようがないものである。(MD/ EI)「育ちは育ち」「氏より育ち」も類似。

○「その親を知らんとせばその子を見よ」：親のことをわかってもらうならば、その子どもを見ればよい。子は親に似る。(MD/ EI)

#### 4. た〜と欄

「た」欄においては、21 事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

○「鷹匠の子は鳩を馴らす」：子どもはその家の職業を見よう見まねで覚えて、それと似たようなことをする。(MD/ EI)「鷹匠の子はよく鷹を馴らす」も類似。

○「龍野訛りは猫でも訛る」：はなはだしい訛りは周りにもうつる。(MD/ EI)

○「他人の中を踏む」：他人の中で生活して、世態人情を知る。(MD/ EI)「他人の中を見せる」「他人の中を見てくる」「他人の水を飲む」「他人の飯を食う」も類似。

○「血に交われば赤くなる」：人は交際する友によってよくも悪くもなる。(MD/ EI)「朱に交われば赤くなる」も類似。

○「父在せば其の志を觀、父没すれば其の行ないを觀る」：父の在世中はその志を觀察し、没後は行為、行跡を觀察する。(MD/ EI)

○「父厳かに子孝あり」：父が折目正しい言動をしていれば、子も父に礼儀正しく孝養を尽くすようになる。(MD/ EI)

○「父父たれば子も子なり」：父が父としての道を尽くせば、子もまた子としての道を尽くす。(MD/ EI)

○「鄭家の奴は詩をうたう」：鄭玄の家の使用人は習いもしないのに詩経を覚えて、それが普段

の会話にも出てくる。いつも見聞していると、自然に物を覚えること。(MD/ EI)

○「寺の辺（前）の童は習わぬ経を読む」：「門前の小僧習わぬ経を読む」も類似。(MD/ EI)

○「同惡相求む（相助く）」：憎しみを抱く対象が同じである者は、互いに心を合わせて助け合う。事の善悪にかかわらず、自分の利益になることなら自然に団結する。(MD/ AF)

○「同氣相求む（求める）」：同じ気質や気心を持った者は、互いに求め合う。(AF/ MD)「同声相應ず」「同性相親しむ」も類似。「類は友を呼ぶ」も類似。

○「尊い寺は門から」：信仰を集める寺は門構えからして立派であり、ありがたい感じがする。外見や雰囲気から伝わってくる。(EI)「尊い寺は門から見ゆる（知れる）」も類似。

○「同病相憐れむ」：同じ病気で苦しむ者同士は、互いに思いやる心を起こす。似たような境遇にいる者同士は、互いに同情し合うようになる。(AF)「同明相照らし、同類相求む」「同類相求むる（集まる）」も類似。

○「桃李もの言わざれども下自ずから蹊（けい・みち）を成す」：桃やスモモは何も言わなくても、花や実にひかれた人が集まってきて、自然に木下に道ができる。徳のある人のもとには、黙っていても、その徳を慕う人が集まってくる。(AF/ MN) 発展的なものとして「桃李門に満つ（優秀な門下生がたくさんいる）」

○「所変れば品変る」：土地が変れば、いつもはあたりまえだと思っていることも違ってくる。土地によって風俗や習慣などがおのずから違ってくる。(EI)「所変れば水変る」も類似。

○「隣厳しくして宝儲ける」：隣家が勤勉な働き者であれば、怠惰な者も自然に感化を受けて勤勉となり、その結果富むようになる。(EI)

○「隣を変えり」：孟子の母が、孟子の教育上の

効果のために、隣のよしあしを考えて、住居環境を変えること。(EI)「孟母三遷の教え」も類似。

- 「鳶の真似をする鳥」：自分の身のほどをかえりみないで、他の真似をする者。(MD)
- 「鳶の子鷹にならず(似ず)」：平凡な親の生んだ子は、やはり同じように平凡である。(EI)
- 「瓜の蔓に茄子はならぬ」「蛙の子は蛙」も類似。
- 「富む家に瘦せ犬なし」：金持ちの家では飼いたままで肥えている。豊かな所では下々の者まで暮らし向きがよい。(EI)
- 「友は類を以て集まる」：何事につけも似かよった者同士は自然に集まるものである。(AF)
- 「類は友を呼ぶ」も類似。

#### 5. な～の欄

「な」欄においては、5事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

- 「長崎ばってん江戸べらぼう神戸兵庫のなんぞいやついでに丹波のいも訛り」：地域のなかでの培われる方言・訛り。(EI)
- 「習い性と成る」：日頃繰り返していることは生まれ持った性質のようになる。(EI)「習慣は第二の天性」も類似。
- 「習うより慣れよ」：物事を修得するには、実際に繰り返しやって慣れるのが一番の早道である。(EI/MD)
- 「似た者兄弟」：兄弟姉妹は互いに性質や好み似ているものである。(EI)「似た者同士」も類似。
- 「似たるを友」：境遇や性質など、互いに共通点を持ち合わせるものが親友となる。(AF/MN)
- 「似るを友」も類似。

#### 6. は～ほ欄

「は」欄においては、20事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

- 「肺腑を突く(貫く)」：心の奥底をつきうごかす。深い感銘を与える。(MN)
- 「羽織着たがる公家の百姓」：公家の領地の百姓は主人を真似て羽織を着たがる。下の者は上をみならう。つまらぬ者が主人の権威を笠にきて自分を高く見せたがる。(MN/MD)
- 「場数を踏む」：実際に経験する度数を重ねる。多くの経験を積んで慣れる。場慣れする。(EI)
- 「箸より重たい物を持たない」：箸より重い物を持ったことがないほど、労働が全くない。ぜいたくに、大切に育てられたこと。(EI)
- 「肌が合う」：自分の性質と合う。気が合う。気に入る。(MN/AF)
- 「母も母なら娘も娘」：母親がだめだと娘も同じようにだめである。(MD/EI)「親が親なら子も子」も類似。
- 「光あるものは光あるものを友とす」：知恵のある者は知恵のある者を友とする(MN/AF)「類は友を呼ぶ」も類似。
- 「彦根の百両袴、八幡の千両棒」：彦根の人は100両たまと袴をつけ贅沢をするが、近江八幡の人は1000両たまっても、まだ天秤棒をかついで質素に働く。(EI/MD)
- 「人の過ち我が幸せ」：他人の失敗は自分にとっての幸せである。逆の学び。(MD)
- 「人の上見て我が身を思え」：人の身の上を見て我が身を考える。人の身に起きたことは自分にもふりかかると思わなくてはならない。逆の学び。(MD)「明日は我が身」も類似。
- 「人は氏より育ち」：人柄や立ち居振る舞いは、生まれついた家柄や身分よりも、育った環境や教育による影響が大きい。(MD/EI)「氏より育

ち」も類似。

○「人は素性（筋目）が恥ずかしい」：人の家柄や血統は争われないもので、なにかにつけて自然と態度にあらわれる。(EI/MD)

○「人は善悪の友になる」：人は交友によって良くも悪くもなる。友人の感化の大きいこと。(EI)

「人はその友によって知られる」も類似。

○「人は習わせ」：人は環境や習慣しだいで変るものである。(EI)

○「百石取っても手鼻かむ」：出世しても貧しかった時の惨めな習慣が抜けがたいこと。(EI) 出世しても貧乏な時の苦労を忘れずに儉約を守れとの言い聞かせの意も。

○「夫婦は従兄弟ほど似る」：長い夫婦生活の間には、互いの性行が似かよってくる。(EI/MD)

○「文は人なり」：文章にはその書き手の人柄が表れる。(EI)

○「文を効（なら）う者を朋とせよ、徒に有る者と語ることなかれ」：学問を志す者を友とすれば、自分も向上するが、無益に過ごす者と話しても何も得るところがない。(EI/MD) このことを踏まえて、「文を以て友を会（あい）す」がある。

○「勿頸の友（朋友）」：相手のためなら犠牲になっても構わない勿頸の交わりで結ばれた友・親友。(MN/AF) 「勿頸の交わり」も類似。

○「方言は国の手形」：方言は、道中手形を見るようにその人の生国を示している。方言でどの国の出身かがわかる、(EI/MD)

## 7. ま～も欄

「ま」欄においては、14 事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

○「誠は宝の集まりどころ」：真実を尽くす人に宝は集まってくるものである。(MN) 「正直の頭

に神宿る」も類似。

○「交わる友を見てその人柄を知る」：どのような人と付き合っているかによって、その人の人柄がわかる。(EI)

○「学ぶ門に書来たる」：学問を好む人の所には自然と書物が集まる。(EI)

○「身は習わし（習わしもの）」：人は環境や習慣でどのようにでもかわるものだ。(EI)

○「身、道を行なわざれば妻子にも行なわれず」：自分自身が正しい道を行なわないならば、妻や子にそれを行なわせることはできない。正しくない者にはだれも従わない。(MD) 逆の学び。

○「水は方円の器に従う」：水は、容器の形が四角ければ四角になり、円ならば円になる。人は、交友関係や環境次第で善にも悪にも感化される。(EI)

○「水広ければ魚大なり」：水の多い所では魚も自然に大きく成長する。環境がよければ人は大成する。(EI)

○「水腐って虫そこに生ず」：世相がよどみ腐敗すると悪しき者がふえる。(EI)

○「水心あれば魚心」：好意があれば、相手もおのずから好意をもってくれる。自然に互いが惹かれあう。(AF) 相手の出方しだいではこちらの態度も決まるとする「魚心あれば水心」は、逆の類似。

○「道は好む所によって安し」：どのような技芸でも、それを好めば上達するものである。(MN) 「好きこそ物の上手なれ」も類似。

○「三つ子の魂百まで（心六十まで）」：幼い頃の性癖や思いは根強く残るものである。(EI) 「三つ子の知恵百（八十）まで」も類似。

○「見様見真似」：人のやることをいつも見ている自然とそのやり方を覚えること。(MD) 「見るを見真似」も類似。

○「孟母三遷の教え」：教育に適した環境を選ん

で住居を変えること。(EI)「孟母の三遷(三居)」も類似。

○「門前の小僧習わぬ経を読む」：日頃から見聞きしていることは、特に覚えようとしなくても自ずから身に付く。幼児期には環境の影響が大きいこと。(EI/MD)「門前の小僧」も類似。

## 8. や～ん欄

「や」欄においては、7事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。

○「善いことは真似でもせよ」：善行は、たとえ人真似でもするほうがよい。(MD)

○「良き癖は付き難く悪しき癖は去り難し」：良い癖を付けるには意志と努力を必要とするが、悪い癖は気づかないうちに身に付いてしまい、容易には直せない。(EI/MD)

○「沃土の民は材にあらず」：肥沃な土地に住む人々は、工夫や努力をしなくても生活できるので、才知も必要としない。恵まれた環境からは有能な人材は生まれない。(EI) 逆の環境影響。

○「余所を見て皿を舐れ」：皿を舐めてもよい席かどうかは、そこにいる他の人の振る舞いを見てから判断せよ。他人の振りを見てから自分の行動を律するようにせよ。(MD)

○「淀む水には芥(ごみ)溜まる」：流れることのない淀み水にはごみがたまりやすく、水も腐りやすい。環境によっては人心の腐敗を招きやすい。(EI)

○「嫁を取るなら親を見よ」：娘はその両親の影響を強く受けているものだから、嫁を貰うときにはまずその親の人柄をよく見てから貰え。(EI/MD)「嫁を見るより親見て貰え」「嫁貰えば親を貰え」「嫁を貰えば姑を貰え」も類似。

○「類は友」：似かよった者が集まる。(AF)「類は友を呼ぶ(集まる・集める)」「類を以って(に

よって)集まる」「類を以って友とす(友を引く)」も類似。

## V 研究の結果と考察

本研究「Ⅱ」における分析の視点は、「資料分析条件」として示し、研究課題の副題においても示すキーワードである。とりわけ「モデリング」(modeling:MD)と「ミラー・ニューロン」(mirror-neuron:MN)は、分析視座の中核として想定しているものである。この2つを包括する概念キーワードとして「環境影響」(environment-influence:EI)および「愛着・親密」(attachment-friendliness:AF)を位置づけている。事例として取り上げた「ことわざ」には、それぞれに該当するコード(MD/MN/EI/AF)を付している。

なお、キーワードうちの「モデリング」および「ミラー・ニューロン」の基礎概念については、「幼稚園教育要領に潜在する教育科学理論仮説(Ⅱ)」(京都文教短期大学『研究紀要・第52集』、2014)においてすでに詳説しているところである<sup>2)</sup>。

### 1. あ～んの各欄の事例数

「ことわざ」の中で、想定したキーワードに関するものは、総数として、「126事例」を抽出した。各欄の内訳については、次のような事例数の結果を得た。

「あ欄」：23事例／「か欄」：15事例

「さ欄」：21事例／「た欄」：21事例

「な欄」：5事例／「は欄」：20事例

「ま欄」：14事例／「や欄」：7事例

「あ欄」から「や欄」の各欄にわたって、「モデリング」「ミラー・ニューロン」「環境影響」「愛

着・親密」のキーワードに関連する「ことわざ」が抽出できた。その多くは、古来より世俗的にも人口に膾炙しているものである。

なお、言い回しの違いはあるものの、各キーワードに関連する「ことわざ」に潜在する意味世界には共通するところもあり、類似する「ことわざ」も散見される。関連すると判断した「ことわざ」は、各事例末に付記し、「ことわざ」事例の重複登録を排除するようにした。

## 2. 各キーワード別事例数

想定した4つの各「キーワード」の「ことわざ」事例については、次のような事例数の結果を得た。なお、「ことわざ」によっては、キーワードの重複登録をしている。キーワード登録総数は、「187事例」である。

「モデリング：MD」：67事例

「ミラー・ニューロン：MN」：15事例

「環境影響：EI」：85事例

「愛着・親密：AF」：20事例

本研究「Ⅱ」においては、「環境を通しての教育と育ち」に照準を置くキーワード分析を試みている。この結果、「環境影響」および「モデリング」に重点が置かれていることが明らかになった。これら二つの「ことわざ」は、主体者が必ずしも環境を意識化しない雰囲気の中で、「結果としての学習」を行なっているとする要因である。

これに対して、事例数は少ない「愛着・親密」および「ミラー・ニューロン」は、主体者の意志が顕在化された「意識化された学習」を行なっているとする要因である。

## 3. 「子ども存在・概念」との事例数比較

本研究「Ⅰ」で取り上げた「子ども存在・概念」では、12のキーワード<sup>3)</sup>から「118事例」を抽出し、事例に内包されている意味世界を浮き彫りにした。「子煩悩的な子ども像」を把握した。子どもの「無邪気さ」「無欲」「純粹さ」などの「真綿」でもある概念でもって「子ども」を包み込む図式が想定されていることを指摘した。

本研究「Ⅱ」における「環境を通しての教育と育ち」に照準を置いたキーワード登録の台帳となった「ことわざ」の事例総数は、「126事例」であり、4つのキーワード登録総数は「187事例」である。

事例数の単純な比較では、本研究「Ⅱ」において照準を置いた「環境を通しての教育と育ち」において「ことわざ」事例数が多い、抽出結果となった。

この結果をおしなべて把握すると、「環境を通しての教育と育ち」は、これまでに面々と受けとめられ続けてきた普遍的な教育的基盤・背景・、要因と考えられる。

## Ⅵ おわりに

素朴なる「ことわざ」には、必ずしも科学的ではない把握であるとしても、人間の英知としての揺るぎない先見性のある教育視座が展望されている。本研究「Ⅰ」および「Ⅱ」における「ことわざ」の事例分析から、その一端を明らかにすることができた。

本研究「Ⅱ」において照準を置いている「環境を通しての教育と育ち」の教育視座は、近代ヒューマンイズムの思潮に、その源流を辿ることができる。「ジョン・ロック (Locke, John)」や「ロバート・オーエン (Owen, Robert)」が然りである。

「環境」の教育的概念は、その後の時を経て、

今日の教育基盤の基本的条件として脈々と位置づけられている。この位置づけは、諸外国において、そして我が国において、とりわけ幼児期の教育・保育の基本とされているところである。例えば、「幼稚園教育要領」（平成 29 年）の冒頭において、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」<sup>4)</sup>ことが、明示されている。

本研究「Ⅱ」で取り上げた「環境を通しての教育と育ち」をめぐる「ことわざ」のそれぞれは、その時代や背景の違いがあり、意味世界も異なるところがありつつも、日常の生活感覚あるいは感情として、思わず納得してしまうところがある。それでいて、教育科学の研究の知見から示唆される視座から、あらためて「ことわざ」を解き明かすことができる。ここに、英知としての「ことわざ」の重みを実感することができるのではなからうか。

「ことわざ」と「教育研究の理論仮説」は、それぞれ異なる文脈で、その視座がある。「ことわざ」事例を、分析のキーワードからコーディングしてみると、それぞれの流れは、偶然に

しても接点を持ち、その交わるところもある。「ことわざ」は、きわめて人間社会での感覚的なとらえ方ではあるとしても、人間生活に根ざした、時代を超えてもなお、ぶれない視座を提供している。持続可能な「教育理論仮説」を見据えた、超えたとも言うべき、その教育視座を内包させていると考える。極論すれば、「ことわざ」の後付として、教育科学の研究成果としての「教育視座」が示されているとの印象もある。

#### 注および引用文献

- 1) 北村孝一・監修『故事俗信ことわざ大辞典』（第2版）、小学館、2012年
- 2) 田中亨胤「幼稚園教育要領に潜在する教育科学理論仮説（Ⅱ）」京都文教短期大学『研究紀要・第52集』、79 - 89、2014年
- 3) 本研究「Ⅱ」において照準を置いた「子どもの存在・概念」に関する12のキーワードは、以下の通りである。「子」「子宝」「子供」「兄」「兄戯」「末っ子」「捨て子」「泣く・鳴く」「七つ」「憎まれ子」「寝る」「幼子・雅子」（参照：田中亨胤「英知としての諺・格言に潜在する教育視座（Ⅰ）- 子ども存在・概念をめぐって-」京都文教短期大学『研究紀要・第56集』、33 - 44、2018年
- 4) 「幼稚園教育要領」（告示）の「第1章 総則／第1幼稚園教育の基本」、2018年、文部科学省

